

現代俳句
大辭典

安住 敦
大野 林
草間 時彦
沢本 欣一
村山 喜郷
編 集

現代俳句 大辭典

編 集

安	住	敦
大	野	火
草	間	彦
沢	木	一
村	山	郷

明 治 書 院



不 許 復 製

現代俳句大辞典

定 価 8,800円

昭和五十五年九月十五日 初版印刷
昭和五十五年九月二十日 初版発行

編集者

安 住 敦 火
大 野 林
草 間 時 彦
沢 木 欣 一
村 山 古 郷

発行者

東京都千代田区神田錦町一丁目十六番地
株式会社 明治書院
代表者 三 樹 彰

印刷者

長 野 市 中 御 所 町 二 ノ 三 〇
大日本法令印刷株式会社
代表者 田 中 忠

発行所

東京都千代田区神田錦町一丁目十六番地
株式会社 明治書院
電話東京 (元) 三 七 四 一 (代)
振替口座東京 三 一 四 九 九 一 番

はじめに

明治二十五年正岡子規が俳句革新の明治新俳句第一声を挙げて以来、満八十五年を経た。その間、近代または現代俳句と呼ばれる今日までの俳句の発展は、三百有余年におよぶ俳句史上未だかつて見ざるめざましい盛事といつてよい。それは単に俳句人口何百万人と称せられる量的増加にとどまらず、質的充実に学問的業績の上に、かがやかしい発展をもたらしている。

明治書院ではかつて昭和三十二年、伊地知鐵男・井本農一・神田秀夫・中村俊定・宮本三郎五氏編集による『俳諧大辞典』を刊行したが、これが俳句・俳句文学界に貢献する所極めて大きかったことは、その後二十数年を経て、なお、版を重ねていることでも自明である。しかし、俳句が国民詩として、明治・大正・昭和と隆昌の一途を辿り、今日に至っているのも周知のことである。数多くの名句集、俳書がその間に刊行され、幾多の俊秀によって幾多の俳句革新運動が興された。『俳諧大辞典』が不朽の名著であることは言を俟たぬが、その刊行企図に明治・大正・昭和が薄くなっているのは否めぬ。今回の『現代俳句大辞典』の刊行企図はそれに応うべく成されたものであり、両者相俟って俳諧・俳句の仔細は網羅され、大辞典は完成したといつて過言であるまい。

本辞典編集の基本方針は、前著『俳諧大辞典』がその名の示す通り、俳諧すなわち古俳句を中心にそこ

に重点を置いたのに対し、今回は子規以後の近代および現代俳句を主とし、そこに新辞典の現代的意義と特色を明確にした。昭和五十三年十月二十七日第一回の編集会議によってその方針が決定されて以来、各自分担して収録項目の選定・採集につとめる一方、毎月数回におよぶ会合を開いて慎重な検討を重ね、翌五十四年四月漸く一応の各項目の選定を終わった。この項目の選定にあたっては、一党一派に偏することなきよう細心の注意と周到な配慮を加え、明治以降の主要な俳人・結社・俳誌・句集・評論・伝記・研究書・文集等の他、俳句および評論の用語・事項また特殊な季題等、広汎な範囲に亘ってひろく現代俳句に關係する各項目を選出した。更にこれら各項目の執筆については、現在、俳句・俳文学界に活躍する俊英諸氏にそれぞれ委嘱すべく、各自ご多忙の中特にご協力をお願いした。記事執筆については、辞典の性格上、綿密正確を期する一方、簡約の中に充実を計るよう特にご配慮を乞い、執筆期日についても刊行の予定に伴い、かなりご無理を申し上げたにかかわらず、刊行の趣旨を諒とせられ、それぞれご専門の分野について、蘊蓄を傾け、最近の研究による学的成果を結集して頂いたことは、本辞典の誇りとするところであり、誠に幸甚の至りである。

こうして大辞典に収むるところの項目約三〇〇〇、執筆にご協力下さった諸氏は、別記一六四氏である。本書の成果は、一にこれら執筆諸氏のご好意とご協力によるものであって、ここに下名らの深く感謝申し上げるところである。

本辞典編集着手以来、足掛け三年、倦むことなく作業を推進したが、その間、明治書院社長三樹彰氏は

欠かさず会議に出席し、指導協力を惜しまれず、また小林美枝子氏はじめ編集室諸氏はあらゆる細部に亘
って綿密な注意補足に尽瘁して下さった。ここに深謝の意を表する。

昭和五十五年八月

編集委員

安	大	草	沢	村
住	野	間	木	山
	林	時	欣	古
敦	火	彦	一	郷

凡 例

一、この辞典は、現代俳句に關係ある項目約三〇〇〇について、解説したものである。現代俳句と称する名題の限界は、明治以降の近代俳句を含むものとした。

二、各項目の執筆には、別記一六四氏がそれぞれ担当し、各項目末尾に執筆者名を記載した。

三、項目の配列は、現代仮名づかい五十音発音順によった。

四、項目の漢字の下に、その読み方をひら仮名（現代仮名づかい）で揭示した。

五、解説の文章は、原則として、当用漢字、現代仮名づかいとし、引用文は原文通りであるが、必要に応じて、濁点・句読点を補ってある。

六、収録した項目は、人名（句集）・書名・誌名・事項（用語を含む）・季語の五種類に分かった。

七、人名は姓号で掲出し、著名な作者については、その作者の代表的と目される句集を人名の項末に付載した。本名と俳号が同一の場合は本名で掲出した。外国人の名前は、一般に呼び馴れている呼称を項目として揭示し、フルネームはその下に記載することにし、生没年月日は西暦年号を記載した。

八、書名の項には、全集・叢書・論文集・研究書・伝記・日記・随筆・歳時記等を収めた。

九、誌名の項には、俳句雑誌その他の雑誌を収めた。

十、事項には、挨拶・旧派・虚実・根源俳句・軽み等の用語、結社・流派・団体・行事および他のいずれの項目にも分類し難いものを収めた。

十一、季語には、一般にわかり易いものを除き、陰暦月、二十四節、俳句の特有語、新季語、紛れ易い季題等、特殊なものを選んで収録した。

十二、図書の判型は、戦前のものは四六判・菊判、戦後はB6判・A5判の呼称とし、その他、文庫本型、新書判型、それに各変型等、厳密な意味での規定には種々困難な点があるので、大体の判型を表示するにとどめた。

十三、解説文中の書名には『』、誌名、新聞名、引用文等には「」、俳句にはへゝを用いた。

十四、本文中の項目に＊を印したものは独立項目として収録されていることを示す。

十五、巻末に、年表および索引を付録として加えた。

十六、索引は、人名・書名・誌名・事項・季語に分類し、それぞれについて作成した。

執筆者一覽 (五十音順)

柴田白葉女	小室善弘	栗田靖	木村蕪城	金子明彦	尾崎騾子	岡田鉄	太田鴻村	瓜生鉄二	上野さち子	井本農一	石田勝彦	飯島晴子	飴山実	阿片瓢郎
島津忠夫	斎藤夏風	栗山理一	雲英末雄	金子篤子	落合水尾	岡田日郎	大谷篤蔵	瓜生敏一	上村占魚	岩下紀之	伊地知鐵男	池上浩山人	綾部仁喜	赤羽学
島本昌一	桜井武次郎	見学玄	草間時彦	金子兜太	鍵和田袖子	岡部六弥太	大槻紀奴夫	宇和川匠助	宇佐見魚目	岩原康夫	伊丹三樹彦	池上不二子	有泉七種	安住敦
清水孝之	佐藤和夫	香西照雄	轡田進	上井正司	桂信子	奥村貞正	大野林火	大内初夫	有働亨	上田五千石	稲田利徳	伊沢元美	有馬籌子	阿部完市
庄中健吉	沢木欣一	河野友人	熊坂敦子	岸田稚魚	加藤憲曠	小倉緑村	大山澄太	大串章	浦野芳南	上田都史	今井千鶴子	石井庄司	安藤五百枝	阿部正美

白石梯三	高柳重信	辻田克巳	中西舖土	新田祐久	橋本鶏二	久富哲雄	福田甲子雄	文挾夫佐恵	細川加賀	松尾靖秋	三橋敏雄	宮坂静生	村田脩	森田峠	矢島房利	山畑禄郎	鷺谷七菜子
鈴木勝忠	田川飛旅子	中島斌雄	中野沙恵	野沢節子	幡谷東吾	檜野子草	福田秀一	古沢太穂	細見綾子	松崎鉄之介	皆川盤水	宮下翠舟	村松紅花	森田蘭	八十島稔	山村佑	和田茂樹
鈴木六林男	田中敦子	永田耕一郎	中村苑子	野村貴次	林徹	平井照敏	福田蓼汀	古館曹人	堀口星眠	松村幸一	湊楊一郎	宮津昭彦	村山古郷	八木絵馬	山崎ひさを	横山白虹	和田暖泡
関森勝夫	田中鬼骨	中田亮	成瀬桜桃子	萩原恭男	原裕	平畑静塔	福永耕二	保坂文虹	前田利治	松本旭	皆吉爽雨	宮本三郎	本井英	八木沢高原	山下一海	吉田鴻司	渡辺千枝子
鷹羽狩行	千代田葛彦	中戸川朝人	西山誠	波止影夫	原田種茅	広瀬直人	復本一郎	星野麦丘人	松井利彦	丸山一彦	宮岡計次	村沢夏風	森澄雄	矢島渚男	山田みづえ	吉田義雄	

あ

藍^{あい} 誌名。岡安迷子主宰。昭和二十一年九月

創刊。戦時中、小諸に疎開の高浜虚子を扶け埼玉県不動岡の自宅にホトトギス発行所を移し、発行に尽力したことから、虚子のすすめにより創刊。ホトトギスの副読本の形で俳文、隨筆、研究などを中心に発足した。三〇年五月再刊号より雜詠欄を設け、多くの作家を育成した。二〇一号から雜詠選を担当した編集長荒川あつしが五三年八月急逝、再び主宰選に戻った。現在編集は息・岡安仁義、浦和市より発行。(宮下)

藍^{あい} 誌名。花谷和子主宰。昭和四八年七月

創刊。はじめ隔月刊の同人誌。師系は日野草城。五〇年一月、一〇号より花谷和子主宰となり、五一年四月、一八号より月刊となる。(桂)

相生垣瓜人^{あいおいがき} 明治三一・八・一四

(公欠)。兵庫県高砂市生。本名貫二。「ホトトギス」同人相生垣秋津の実弟。大正九年東京美術学校製版科卒。浜松工業学校(現工業高校)に勤務し、昭和三〇年に退職。俳句は昭和五年より「ホトトギス」に投句したが、いわゆる四Sのうち秋桜子・青畝にもっとも魅力を感じ、

あいーあいさ

その主宰誌「馬酔木」と「かつらぎ」に投句し

た。昭和六年「馬酔木」独立の際これに従い「ホトトギス」を辞す。昭和八年「馬酔木」に俳壇はじめての自選同人制が敷かれた時、第一期同人に推された。昭和三〇年第一句集『微茫集』を出版。三六年馬酔木賞。昭和五〇年刊行の第二句集『明治草』により第一〇回蛇笏賞を受賞した。昭和二三年より百合山羽公と俳誌「海坂」を共同主宰、今日に至る。初期には「朝ぐもり海岸日傘ひとつひらく」のように絵画的な句やかな句もあるが、最近は世俗の名利の外、無欲清澄の眼の写す森羅万象を、時にユーモラスに、時にはアイロニカルに諷詠して独自の句境に遊ぶ。「瓜人仙境」として強烈な支持者をもつ所以である。句集に前記『微茫集』(昭三〇)と『明治草』(昭五〇)がある。

草々の呼びかはしつづ枯れてゆく
隙間風その数条を熟知せり

【明治草^{めいし}】 昭和五〇年二月一〇日、海坂発行所刊。B6判二七一頁、二五〇〇円。装幀挿画、著者。昭和三〇年より四九年までの作品一三〇〇句を年代順に配列。集中一句として字余りの句、前書を伴う句無く、旅行吟もない。著者とその身近な草木鳥虫で作りなす壺中の天地を、古格を守りながら極めてユニークに詠み上げている。第一〇回蛇笏賞受賞。(護国)

春睡も既に濃からず甘からず

相生垣秋津^{あいおいがき} 明治二九・四・二九

昭和四二・四・二七(ハバク・九五セ)。兵庫県高砂市生。本名三次。高等小学校卒業後、家業に従事しつつ画や俳句を学ぶ。大正一〇年上京、川端画塾に入り、また川合玉堂門下として絵画の本格的な精進を始めたが、関東大震災により挫折、以後高砂市に住みつゝ。昭和二年永田耕衣と「桃源」を創刊したが三号で廃刊。「ホトトギス」「玉藻」「かつらぎ」「九年母」所属、各同人。句集に『白毫帖』(昭一五)『山野抄』(昭一六)『砂上』あり。(有働)

起し絵のうしろ手にせる刃ものかな

愛吟^{あいぎん} 誌名。上川井梨葉主宰。昭和五年

二月創刊。梨葉はこれ以前第二次「俳諧雑誌」を主宰。編集近藤白亭。初期には春草・龍雨・白水郎らの寄稿が見える。一人一境の自由さの中に、遊びのない真実の作品を目指したが、一六年終刊。引続き梨葉賛助、清水丁三(大河内信敬)選の「円画」として一八年迄存続。現在神辺琴々を中心に、「新川」(発行木下子龍、編集渡辺春輔)刊行。白亭・山静・石猿・白龍・南枝・沙朶・夫佐恵他が拠る。(文芸)

挨拶^{あいさつ} 事項。昭和二三年刊現代俳句協会編「俳句芸術」第一輯に山本健吉は「挨拶と滑稽」と題する一文を載せ、その中で俳句固有の

方法は、滑稽・挨拶・即興、という三つの命題の上に成立すると述べた。この中の「俳句は挨拶なり」というのは、本来俳句にある対詠的、唱和的な性格を単的に明確にしたものであり、戦後これを再確認したことは意義のあることであった。もともと俳諧連句における発句は、一座の亭主をはじめ連衆に対する挨拶であり、また脇句のみならず以下の全付句に対する挨拶の意を含むものであった。またそれを受けた脇句にも客に答える亭主の挨拶という意があった。芭蕉が園女を訪うた時「白菊の目に立てて見る塵もなし」と詠じたのは、俳席にあった白菊を觸目としているが、園女の人格に対する挨拶であったことは有名である。また同じく芭蕉が近江の連衆と会した折「行春を近江の人とおしみける」と詠んだのも、連衆に対する挨拶であると同時に、晩春の近江の風光への挨拶であった。高浜虚子は『虚子俳話』（昭三三）の中で、「俳諧（連句）に挨拶といふ事がある。それは『木枯の身は竹斎に似たるかな（芭蕉）』の客としての挨拶に対して、脇句に、『誰そやとばしる笠の山茶花（野水）』の主人としての挨拶を附けた類である」といい、また「お寒うございます、お暑うございます。日常の存問が即ち俳句である」さらに「平俗の人が平俗の大家に向つての存問が即ち俳句である」といっている。

「存問」というのは心にかけて忘れずに安否を問うことで、ほぼ挨拶と同義の言葉である。山本健吉はこの説に対し「氏（虚子）の存在のゆるぎなさは、俳句を『日常の存問』として、刻々のうちに俳句に生きてゐることに在るのであらう」といったが、これに対して虚子は「然り、四季の自然、人間に対する私の存問である」と答えている。俳句には「贈答句」「慶弔俳句」などもあり、根底にはそのような挨拶性があるということである。（村沢）

相島虚吼（あいしま） 慶応三・一二・一九（昭和一〇・四・四（一九三〇））茨城県生。本名勘次郎。小学校時代より漢詩を学ぶ。明治三三年大阪毎日新聞社に入社、編集主任、副主幹、顧問。のちに「昭和日日新聞」を創刊し主宰となる。欧米に遊ぶこと二回、また茨城県より衆議院議員に当選、憲政擁護に奮闘した。俳句は日清戦争のとき記者として従軍。帰国の途上、船中で子規と識つたのを契機として作句をはじめた。中川四明・寒川鼠骨らの満月会に入り盛んに新聞「日本」に投句した。子規没後は虚子に師事し、大正一三年「ホトトギス」同人。作風は明朗磊落、大らかな詠いぶりを示し、写生の中に飄逸味のあるものが多い。著書に『虚吼句集』（昭七）、没後に『相島虚吼句集』（昭一一）がある。（木村）

登山口道に画きて教へけり
放屁虫貯へもなく放ちけり

会津八一（あいつち） 明治一四・八・一（昭和三一・一一・二）（八六～一九五五）新潟市古町通

生。別号秋卿道人・渾斎。歌人・美術史家。子規の影響を受けて中学時代より俳句・短歌に親しむ。早稲田大学文学部卒。美術史研究により学位。同学教授。著書は美術関係に多く、歌集に『南京新唱』（大一一三）『鹿鳴集』（昭一五）『寒燈集』（昭二二）、書跡に『渾斎近墨』（昭一六）『遊神帖』（昭二二）など。俳句は『会津八一全集』新版（昭四三～四四）第五・第一〇巻に収録。第一〇巻は俳話も編む。（奥村）

睡蓮の水すまば筆を洗ふべく

相葉有流（あいば） 明治四〇・七・二九（一九二七）千葉市生。本名伸。東京文理科大学卒。文学博士。現在群馬大学名誉教授・上武大学名誉学長・日本印度学仏教学会理事。『日本仏教史話』（昭一八）等著書多数。俳句は安藤姑洗子に学び、加藤楸邨に師事。「寒雷」同人。「石人」主宰。句集に『滄浪』（昭四一）『化転』（昭五三）あり。（金子兜）

華も月も化転の葉か年昏るる

青（あお） 誌名。波多野爽波主宰。はりまだいすけ編集。昭和二八年一〇月創刊。昭和二二年六月に発足した爽波を中心とする京大ホトトギス

会の「春菜会」が母体となった。高浜虚子は「青」といふ雑誌チューリップヒヤシンスへ「ヘチューリップヒヤシンスのち梅椿」の二句を贈って

三十一歳の主宰爽波を祝福、集まった人々を励ました。昭和三年野見山朱鳥「*菜穀火」、橋本鶏二「*年輪・福田夢汀」「*山火」と四誌連合会を結成、伝統俳句の正しい展開を希求、力を尽くした。昭和三八年に友岡子郷が第六回「四誌連合会賞」を受賞、この年に創刊一〇年を機に宇佐美魚目・太田文萌・大峯あきら・柏村貞子・友岡子郷・馬場駿吉・吉田秀芝を同人に推挙、はじめて同人制を布いた。爽波は虚子門、昭和二年、二五歳でホトトギス同人になった。指導主張は厚生、花鳥諷詠。伝統派の異色話。物故作家に吉田秀芝、のちに中杉隆世・吉本伊智朗・島田刀根夫・野口喜久子・前田直子・山本洋子らが同人になった。

（宇佐美）
青嵐あおあし 季語（夏） 青葉のころ青一色の草木をゆるがして吹きわたるやや強い南寄りの風。薫風というのも同義であるが、青嵐よりは弱くやわらかい感じである。（安住）

峡中のひとの生きざま青嵐

龍太

葵あひま 誌名。伊東操浦主宰。昭和六年二月創刊。横浜。大谷句伝系。兵藤蘇坤・岩瀬公子楼・白石紅蔭・藤尾土瓜子らその他を擁して昭和九年六月まで発行して休刊に入り、その後

「普門」、さらに「普門句帖」と改題して断続発行、戦後「残紅」として復刊したが同二九年廃刊となった。

青い地球あおいちゆう

（藤谷）

誌名。昭和三六年二月、「芦火」休刊のあとをうけつぎ岡涓二によって創刊された。編集方針として、（一）同じ自由律俳句を作りながら別派をなしている人たちの交流、（二）作家の個性を伸ばすことにとめる、（三）自由律精神をもやし一碧樓の精神を時代的に蘇らしていく、の三点をかける。岡涓二没後も右の方針を堅持、作品審査鈴木あつみ、編集兼発行日下部正治。昭和五五年一月現在通巻一〇八号。青い地球賞を設けている。

（瓜生寛）

葵祭あひまつぎ 季語（夏） 五月一日に行われる京都の賀茂別雷神社（上賀茂神社）と賀茂御祖神社（下鴨神社）の祭で三大勅祭の一つとされている。京都御所で行われる宮中の儀に始まり、午前一〇時半御所を出発、路頭の儀に移る。昼ころ下鴨神社、午後三時半頃上賀茂神社に着き、それぞれ社頭の儀を行う。平安朝時代の装束で、参加者から牛馬に至るまで桂の葉と葵の葉をつけて飾るので葵祭と呼ばれる。賀茂祭。

（金子篤）

賀茂祭潰れた顔の牛童
青木稲女あおきいななご 明治三一・九・九、昭和三三・三・二四（八六―一五五）。東京浅草生。旧

姓吉田。本名ひさ。青木再来と結婚、はじめ大阪市西区九条通日英学館内に住む。俳句は枅岡泊露に学び、大正一〇年ごろ虚子門に入り、次第に男性をしのぐ俳句を作り、関西における代表的女流となった。のち天理市に住み、俳誌「*麦秋」を主宰。著書に句集「田舎」（昭二六）。ほかに「俳句の味」（昭二九）あり。天理市念仏寺に句碑がある。

（蒲野）

秋日和ただの田舎に遊びけり

青木月斗あおきげんと 明治二一・一一・二〇、昭和二四・三・一七（八九―一九四）。大阪市東区南久太郎町生。本名新護。別号図書・月兎。父は富山県高岡の青木新十郎。母は兵庫県洲本の倭千代子。八名中の二男。家業は薬種商で快通丸、天眠水本舗として知られた。明治二二年父が没し、二七年大阪薬学校へ入ったが中退して家業を継承。句作は幽蕪亭梅潤の娘である母が句を書きつけているのを見真似したのに始まる。松村鬼史・山中北渚らと水落露石を訪ねたとき子規を知り、明治三二年新聞「日本」へ投句して子規に認められ、子規の無村忌にも参加した。明治三〇年大阪満月会を京阪満月会より分離、その育成に努め、明治三二年「*車百合」創刊。子規は「俳諧の西の奉行や月の秋」の祝句を送り、大阪俳壇の雄となり、また中央俳壇にも認められた。同三三年妹茂枝が河東碧梧桐と結婚。

同四一年実子御矢子を碧梧桐の養女にした。大正四年「ホトトギス」課題選者となり、翌年「カラタチ」、同九年「同人」を創刊。昭和八年改造社『俳諧歳時記』（夏）分担執筆。綜合句集に『同人第一・第二・第三句集』及び『時雨』（歳時記形式）あり。つねに作品中心主義を貫き著書は『子規名句評釈』（昭一〇）のみで自著を嫌った。京都金福寺に葬られ、門弟により毎年斗忌法要が修されている。没後昭和二五年同人社より『月斗翁句抄』（昭二五）が刊行された。

春愁や草を歩けば草青く

乍雨乍晴や今年竹

【月斗翁句抄】（昭和二五年三月一〇日、同人社刊。B6判二七〇頁、二五〇円。昭和五年より一四年までの句を収録。総句数二二八六句。）

踏み渡る暗き野水や三日の月

青木此君楼

明治二〇・四・一三

昭和四三・二・二〇（八七〜八六）。福井市生。本名茂雄。明治三九年福井中学卒業後東京・京都・福岡県・広島県と居を移し、大正一二年以降大阪に住む。文房具店の経営、区役所・女学校（事務）勤めなどをした。大正元年京で花の本聴秋門に入るも、同四年「層雲」に転じ井泉水に師事した。殊に大正末年の「層雲」短律時

代に活躍。層雲第五句集「泉を掘る」（大一一四）では巻頭第一位を占めた。昭和一五年「層雲」を離れ、その年廃刊になった「第二日曜」の後継誌「新俳句」の選に当たった。それ以後第二次・第三次の「新俳句」「木槿」「句信」「白嶺」等の選句をつとめ多くの門下を指導した。句集に『此君楼』（昭一二）『続此君楼』（昭二五）『梅花』（昭二九）『梅花以後』（昭三一）『流れ木』（昭三五）『せきせい』（昭三八）『此君楼全句集』（昭四二）『此君楼全句集補遺』（昭四八）があり、井手逸郎が研究書を出版。（瓜生悠）

ここにひかりあつめているほうせんか

草も月夜

青木よしを（明治二九・九・二八（六六））。東京生。本名幸太郎。大正四年、渡辺水巴の指導した「智仁勇」俳壇に投句、五年「曲水」創刊と共に参加。川越苔雨・海野長頸子らと寒燈会という勉強会を結び精進した。現在「曲水」最古参として雑誌欄の選者。水巴の唱道した「生命の俳句」を目標とした写生道をもって社内を教え、作風はゆるみ無く格調の高いものである。（横野）

掛桶やかけしばかりの薄みどり

青桐

誌名。堂本鯉城主宰。大正一一年より山陰地方で断続的に発行されていたのが、昭和六年八月発行所を広島に移し定期刊行とな

る。主要同人大久保如囚・山田黄星・島東吉。個性的作品、自由な論評を主眼とした。（村沢）

青桐（佐藤鏡秋主宰。昭和一六年創刊。二七年まで継続刊行をつづけていたが一時中断。三八年四月に復刊第一号を出し隔月発行となった。主宰の師系は矢田挿雲。堅実な作風を目指している。）

青潮

誌名。昭和一一年一月創刊、二六年七月廃刊。和歌山県田辺市で岩根冬青の発行により、小山寒子の雑誌選により発足したが、一三年、寒子没後休刊。一四年より佐野まもるの雑誌選により再刊。戦時中一時「龍野」と合併して「神奈火」となったが、戦後二年、「鷹」と改題して復刊。更に旧誌名「青潮」に復したが、冬青の「天狼」参加により、廃刊。通巻一八九号。（石田）

青芝（誌名。八幡城太郎主宰。昭和二八年八月創刊。日野草城の高弟であった八幡城太郎が、病草城を慰めるために創刊した。月刊。誌名も、草城の第二句集「青芝」に由来する。「青芝友の会」の会員のなかに、作家・詩人・歌人・俳文学者・随筆家、などの名が見え、俳壇以外の主宰の交遊の広さが、誌面に反映している。発行所は、町田市、青柳寺にあり、僧籍にある八幡城太郎が自ら編輯にあたっている。草城の抒情性を継承している俳誌。昭和五五年

草城の抒情性を継承している俳誌。昭和五五年

七月で通巻三三〇号。

(桂)

青嶺^{あおね} 誌名。水谷砕壺発行。昭和九年四月創刊。日野草城を遷者とし、井上草加江・片山桃史・笠原静堂ら大阪の都市生活者たちが、その哀歓を詠い、新素材を競った。翌一〇年、「ひよどり」「走馬燈」と合併して「旗艦」を出す、その主流ともなった。

(伊丹)

青葉潮^{あおばしほ} 季語(夏) 初夏新緑のころ、本州沖合に差しこんできて北上する明るく澄んだ暖流を言う。それはブランドンの繁殖で濁った寒流や沿岸水域との間にあざやかな潮目をつくり、渦潮を現じる。青山潮。

(安住)

青葉潮船の厨に出刃置かれ

昭

青葉三角草^{あおばさんかくそう} 明治四二・八・八(二六) 千葉県生。本名誠。慈恵医大卒。開業四〇年。唐笠何蝶の弟。中学時代より兄の影響で作句に志し、「ホトトギス」に四五年間投句。虚子・年尾に師事。地球の真を直観する句を主張し、昭和五五年現在、ほとんど俳句を止めている。「ホトトギス」同人。著書に『三角草句集』(昭四七)『新らしき伝統』(昭四八)『写生理論と実作』(昭四八)『宇宙』(昭五〇)。(今井)

霧はれて地となり天となりにけり

青柳志解樹^{あおやなぎしげき} 昭和四・一・二四(一九二五)

長野県生。本名茂樹。造園業。昭和二八年、林邦彦と識り句作。「寒雷」投句。郷里の相馬

あおね—あかぎ

遷子を尋ねて発奮。三二年「鹿火屋」入会、四三年鹿火屋賞受賞。四八年鹿火屋第一回作家賞を受く。傍ら「塔の会」に参加。五四年一月「山暦」を創刊主宰。句集に『耕牛』(昭四三)『杉山』(昭四八)『山暦』(昭五〇)『山水』(昭五四)。

万両やみづからの実にことば溜め

【山暦^{さんれき}】 昭和五一年六月二〇日、牧羊社刊。B6判一五三頁、一六〇〇円。『耕牛』『杉山』につぐ第三句集。昭和四八年から五〇年までの三〇〇句を収む。

(上田五)

石に声ありしと思ふ寒草

赤尾兜子^{あかおとうし}

大正一四・二・二八(一九二五)

姫路市生。本名俊郎。昭和一六年、大阪外語に入学。俳句・短歌部へ入り実作を始める。司馬遼太郎・陳舜臣も在学し、相互に影響し合う。京大文学部中国文学科に進んでは、昭和二二年に「太陽系」同人となる。日野草城・水谷砕壺・神生彩史らの許で、学生俳句運動を担う。卒業して毎日新聞に入社、神戸支局から大阪本社時代を通じて風交を広め、新しい俳句の啓蒙に努める。昭和三〇年「坂」を創刊し、「薔薇」同人ともなる。三三年「俳句評論」創刊に参画して代表同人。東京の高柳重信、神戸の永田耕衣らとの往来が繁しくなる。三五年「坂」を解体して「渦^{うず}」を創刊、主宰の気負いを見せる。

三六年、第九回現代俳句協会賞を受ける。俳人協会未分の最後に当たる劇的なものであった。日本ペンクラブ会員として、渡欧二回、渡豪一回、国際的交流にも積極的である。句集に『蛇』(昭三四)『虚像』(昭四〇)『赤尾兜子句集』(昭四五)限定肉筆句集『龍の裔』(昭五〇)『歳華集』(昭五〇)『稚年記』(昭五二)。新興俳句系から出て、前衛俳句陣の有力作家となったが、近頃は古格を踏まえて沈潜の句境に達するなど振幅の激しい道程を迎える。書芸にも一見識をもち、その方面での批評活動も見逃せない。神戸市文化賞(昭五三)を五十嵐播水・耕衣に続いて受けた。

(伊丹)

音楽漂う岸侵しゆく蛇の飢
数々のものに離れて額の花

赤木格堂^{あかきかくどう}

明治一二・七・二七(昭和二三・一二・一(一九三二)) 岡山県生。本

名亀一。東京専門学校卒。のちバリに留学。帰国後衆議院議員、九州日報・山陽新報主筆。居村に村長を勤めたこともある。俳句は一八歳ごろから父に学び、明治三二年子規入門、俳句および短歌に専念した。日本派の代表句集『春夏秋冬』に選ばれた句数に見ても、その精励ぶりが認められる。短歌の面でも子規の指示で岡山の歌人平賀元義の歌を集め、子規による元義再評価の機会を作る。子規の病状に応じて新聞

「日本」の選句を扱ったこともあり、子規の後継者と見られる向きもあった。三五年所用のため帰郷、師の死期には臨めなかった。子規没後は門下の葛藤を避けてそのまま俳壇を退く。俳風は平明清純の中に孤高の趣があった。俳壇の主流とはならなかったが子規門の耆宿の一人として知られる。

(奥村)

生きて世に一燈を守る子規忌かな

落柿舎に長逗留や豆の花

赤城さかえ

明治四一・六・三〇昭和

四二・五・一六(六九—一六七) 広島市生。国

文学者藤村作の次男。本姓藤村、本名昌。学生運動で東大文学部中退。地下運動に入ったが後に転向、二二年日本共産党へ再入党した。昭和一八年、結核療養中「寒雷」に入り、二四年腰響作家(同人)に推された。二三年新俳句人連盟に加盟、「草田男の犬」論争を展開して当時の極左的偏向とたたかった。二四年結婚再発、国立東京療養所に入り石田波郷と同室。二六年「道標」同人。二九年退所し三三年結婚、長男を得た。三六年「赤旗」俳句欄選者。四三年三月東京青山の「無名戦士の墓」に合祀。句集に『浅蜩の唄』(昭二九)『赤城さかえ句集』(昭四二)、評論集に『戦後俳句論争史』(昭四三)。戦後俳壇の代表的評論家としてマルクス主義芸術理論の俳句評論への適用という未開拓の部門

に鉄を入れ輝かしい業績を残した。

咽ぶごと稚木萌えおり多喜二忌以後

向日葵かがやく如き党務が予後に待つ

【浅蜩の唄】

昭和二九年一〇月一日、ユ

リイカ刊。B6判三七頁、三〇〇円。昭和一

六年から二八年の六三〇句を三部に分けて取

録。題字加藤徹郎、巻末九頁にわたる後記があ

る。

秋風やかかと大きく戦後の主婦

アカシヤ

誌名。昭和二〇年一〇月創刊。

戦後俳壇に復帰早々の日野草城を主宰に迎え土

岐鍊太郎が発行。これに同門の八幡城太郎・小

寺正三・桂信子・伊丹三樹彦らが加わり、北海

道に新しい抒情俳句の世界を樹立した。二七年

からは鍊太郎が主宰、その没後の五二年八月、

岡沢康司が継承。初期の新興俳句系の作風は漸

次薄らいたが、「生活のうたこえ」の提唱は揺

がぬ。康司句集に『盆の月』(昭五四) 鍊太郎

句集に『北溟抄』(昭五四)。白萩・笛夫・正

之・螢介・蒼門・淑子・須美子・菜穂子・啓

子・欣子らが活躍。

阿片瓢郎

明治三九・四・二八(一九〇

一)。東京市浅草生。

本名久五郎。昭和三年東京

商大卒。満鉄入社、日満商事・満州国經濟部

を経て、二一年帰国、経済安定本部・三機工業

その他に勤務。俳句は昭和六年、谷川静村を通じ

て渋柿入門、東洋城・喜舟に師事、「渋柿」の

幹部作家の一人である。連句の名手で、五三年

「連句研究」を創刊、現代連句の復興に功があ

った。句集に『泰山木』(昭四三)。

(章聞)

囀りは天の余白を占めにけり

アカネ 誌名。伊藤左千夫主宰。三井甲之

編集発行。明治四一年二月創刊。文芸雑誌。子

規没後の根岸短歌会の機関誌「馬酔木」を継ぎ、

短歌に限らず文芸一般誌として発行。俳句では

創刊号に乙字の「俳句界の新傾向」次号に「日

本俳句」評論」が載り、新傾向運動の契機とな

る。のち左千夫は甲之と融和せず同年一〇月去

って「アララギ」を創刊、以後甲之中心の誌と

なる。俳句は乙字・井泉水・六花・碧童選で募

集された。四二年二巻六号で休刊、全一八冊。

四四年五月再刊、翌年五月「人生と表現」と改

題され廃刊した。

(奥村)

茜

誌名。新井声風個人誌。大正六年五

月創刊。第三号より石楠派亜浪系の同人誌と改

める。木歩・魁浪・良太。巻頭論説は亜浪の

執筆、雑誌選声風。翌七年一月号を木歩句鈔

(亜浪序) 特集。三月号にて休刊。

(原田)

赤羽学

昭和三・一一・三〇(一九

一)。松本市生。旧制松本高校を経て、東北大学

文学部卒。岡崎義恵・北住敏夫に師事し、日本

文芸学を学ぶ。岡山大学教授。芭蕉俳諧の性

格・手法・美的様相・連句の手法とその付合の美的様相の四分野について、総合的・基本的な考察を加えた『芭蕉俳諧の精神』(昭四五)により文部大臣賞、ついで文学博士を授与。学風は作品を通して実証的に作家に迫るを旨とし、常に原典に即した作品の検証に意を用いている。芭蕉の紀行文・俳文に力を注いで、弥吉菅一らと『芭蕉紀行集』三冊を編み、さらに、基礎資料を網羅した『芭蕉俳文句文集』を刊行した。単独には、諸本・成立・旅程・周辺資料等について、徹底的追求を試みた『芭蕉の更科紀行の研究』(昭四九)があり、なお、『みなし栗翻刻と研究』(昭三七)初期の連句を扱った『芭蕉連句全註』(昭三七)、『校本芭蕉全集 中の遺語集その他』(共著、昭四二)『芭蕉翁追善之日記』(昭四九)曾良の残した原本と諸本を集め、影印翻刻した『雪まるけ』(昭五一)等の諸著がある。

(吉田豊)

赤富士^{あかふじ} 季語(夏) 夏の富士山が、とくに裏富士にあって、早暁の僅かな時間、朝日を反映して真紅に染まることがある。これを特に「赤富士」と呼んで称える。

(安生)

赤富士に露^{つゆ}滂^{ほう}たたる四^よ辺^{へん}かな

風生

赤星水竹居^{あかほしすいしやく} 明治八・一・八／昭和一七・三・二八(八五五～一九四三) 熊本生。本名陸治。虚子と同年。学生時代より子規、虚子の文

あかふーあき

学活動に興味を持ち、三菱入社後内藤鳴雪に俳句入門、のち地所部長即ち丸ビル「ホトトギス」社の大家として虚子と初対面、大正一四年秋より虚子門下となる。俳句の他に写生文をよくし、虚子も高く評価していた。「読みだしたらやめられない文章」とは風生の評。「ホトトギス」同人。著書『水竹居句集』(昭二五)文集『万年青』(昭五)『東京便り』(昭一一)『玉とニ』(昭一三)『虚無僧』(昭一四)『虚子俳話録』(昭二四)他。

(今井)

風鈴のならねば淋しなれば憂し

赤松憲子^{あかまつけんし} 昭和六・一・一八(三三)。

広島県能美島明慶寺生。本名恵。広島県立第一高女在学中より「雪解」同人加来金鈴子の指導を受け、昭和二三年皆吉爽雨の「雪解」入門。

同二八年徳山市徳心寺赤松尚爾に嫁し、同年「雪解」同人。雪解賞二回受賞。同人誌「華かご」を創刊したが期するところあり一〇〇号で廃刊。句集に『子菩薩』(昭四〇)、第一五回俳人協会賞受賞『白毫』(昭五〇)。

(和田豊)

鶴啼いて月に一滴つつの金

赤松柳史^{あかまつりゅうし} 明治三四・三・二一／昭和四九・九・一五(三二～一九三三)。

香川県小豆島生。本名正次。『倦鳥』の松瀬青々に学び、別に日本画を森二鳳に学んだ。やがて独自の柳史俳画を樹立し、昭和二三年俳句と俳画の月刊誌「砂

丘」を大阪で創刊。京都に住み、現代俳画協会の成立まで草創期の理事長を務めた。句集に『山居』(昭二八)『柳史俳画教室』(昭四六)『四九』全一〇巻など。

(森田暢)

野仏の鼻かげ手かげ囁れり

阿寒^{あか} 誌名。唐笠何蝶主宰。昭和二二年二月創刊。北海道北見、のち札幌に移転、昭和三年四月、主宰何蝶の病氣により通巻一七七号で休刊。嶋田一步・摩耶子夫妻をはじめ多彩な顔触れを擁した。

(今井)

秋^{あき} 誌名。石原八束主宰。昭和三十六年一月創刊。昭和五五年で二〇周年を迎える。はじめ石原宅における三好達治を囲む文章会の発表機関として、また、石原指導の若手句会「青潮会」の発展した姿として創刊。前期一〇年は石原主導による石原・松沢昭・猿山木魂・鈴木詮子・文挾夫佐恵・菅井静子・平原玉子・大槻紀奴夫らの共同編集、後期は八束編集。秋叢書、秋新書の出版三〇点。本誌の三好達治追悼号等は研究者に欠かせないもの。この間、石原が芸術選奨を、文挾・鈴木が現代俳句協会賞を受賞。秋賞受賞者に平木智恵子・松本美紗子・石原君代・深谷雄大・植村幸北・村山鶴映・小出秋光ら。近刊句集の伝田監(『野火の沖』・森本芳枝(『胡蝶蘭』・木村えつ(『喝采』)は秋育ちの有力新人として好評。主要同人に馬詰柿木・